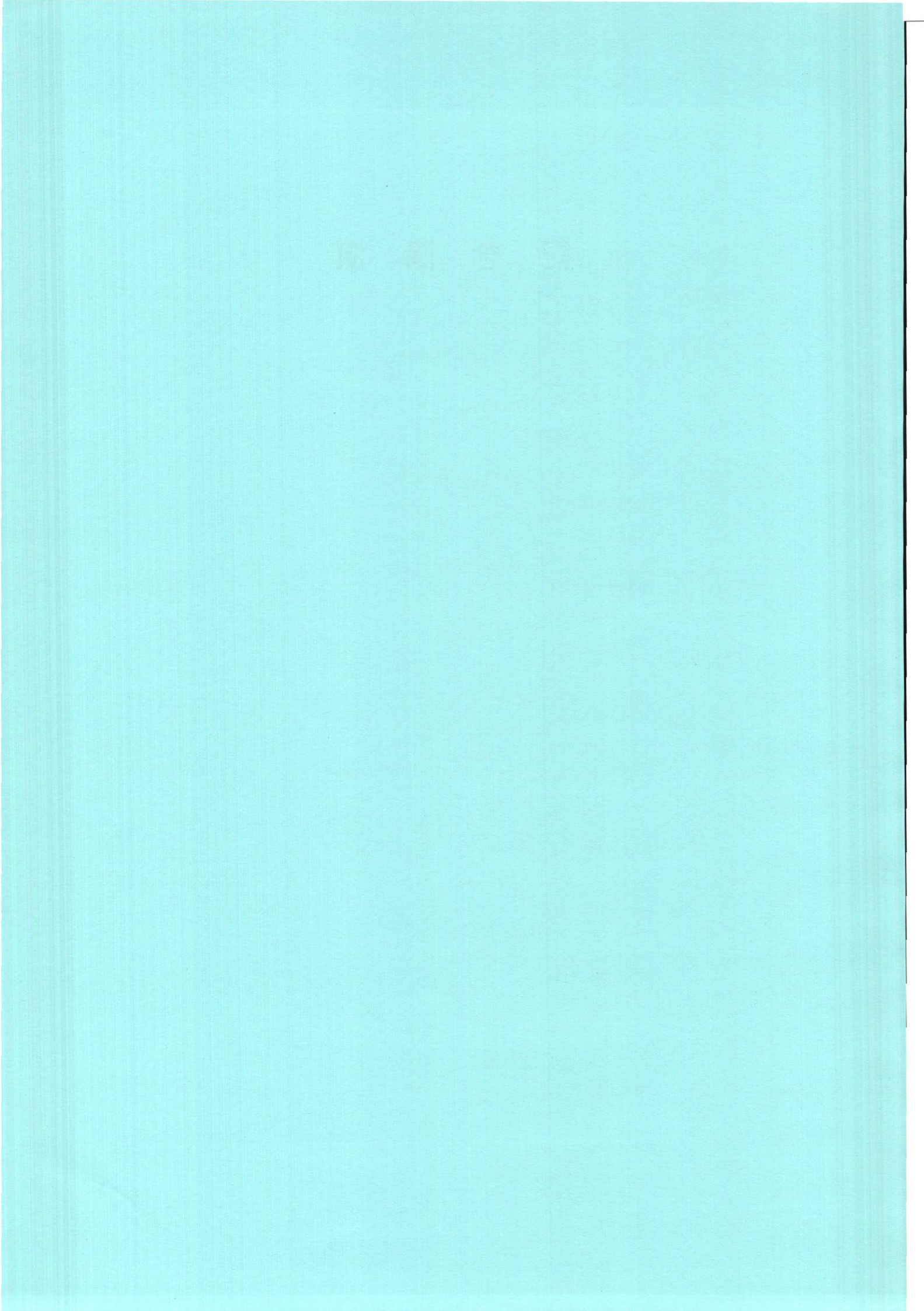


記 念 講 演



メディアと原子力報道

評論家 木元教子 先生

おはようございます。木元でございます。よろしくお願ひいたします。

大変恐縮ですけれども、私のところだけが明るいですね、できたら、この会場、もっと明るくなるので、会場も明るくしていただければ——ありがとうございます。これでお顔が見えてきたんで、何か真っ暗な中でだれに話しているかわかんないような状態、歌手ならいいんですよ、ここで陶醉して歌うには、こういう余計な顔見えない方がいいんですけど（笑声）、歌手じゃなくて、お顔を見ながらお話ししたいので、ありがとうございます。これで、ああ、そうかと、こう、随分お目にかかった方がたくさんいらっしゃるの、私は何もお話ししなくても共通項がたくさんあるんじゃないかと思うんですが、私なりの事情で、お話ししたいこともたくさんありますし、それからきのう吉岡先生がお話しになって、吉岡君も——君もなんておかしいけど、仲間で私もずっと円卓会議から何から、それから資源エネルギー庁の方が古いんですけれども、そちらの方で原子力部会であるとか需給部会であるとか、総合エネルギー調査会の中でやらせていただく中で、吉岡君は仲間です。それから、中村政雄さんも仲間です。一緒にことしもUAE、今のアラブ首長国連邦、それから例のイランにも行ってまいりました。

イランの原子力発電所をお互いに見ようと思ったんですが、実は外務省から、当時ですよ、2月ですから、絶対行くなと言われてまして、なぜかと聞いたらアメリカが嫌がるとうんですよ。

外務省の悪口言うわけじゃないですけれども、真紀子さんの応援団をやっているものですから、ちょっとしょうがないんですが、やはり外務省は、大変気を使っていらっしゃるしまして、今アメリカはイランとまあまあよくなってきましたけれども、パキスタンとも悪かったわけですから、パキスタンは当然行けない、それからイランが原子力発電所をつくるということで、実はあそこはドイツのシーメンスが入って、作りかけていたのがイラン革命があつてできなくなっちゃって、またやろうということでやり始めているんですね。南の方ですけれども、そこを見たいと申し上げて、かなりオファーしていたんですけれども、イランはOKなんですけれども、日本の外務省の方が、もし日本の私とか中村さんとか、かなりエネルギーに関連のある人が見に行くわけですから、そうすると「李下に冠を整さず」じゃないけれども、行ったら日本国がイランの原子力発電を応援したということになると、だからよくないと。なぜじゃ応援したことがよくないのかと聞いたら、いや、イランは、あの辺、パキスタンやインドが全部核実験やってますから、イランだって将来核兵器をつくるためにプルトニウムを利用するかもしれないから、そういうような先のことを考えると、日本がそれを応援したらまずいと言うから、じゃなぜイランが原子力発電所をつくるかということを私たちの立場で聞いてくるのはやぶさかではないじゃないかと申し上げましたけれども、やっぱり事前にいろいろ工夫をさせていただきましたが、行くまでは行けるか行かないかわからなかった。

ところが当日やっぱり行きましたら、イランの方からはOKなんですけど大使館の方からはだめだということになって大変残念な思いがあります。でも、正直言って近くまで行きました。

インドの場合もかなり面白かったんですが、これもインドの原子力研究所というところで、大変権威のあるところなんですけれども、そこも原子力の研究をやっているから見せてほ

しいと見学を申し込んだんですが、だめでした、この研究所だけは。というのは、やはり軍事機密を持っているんじゃないかなという気がして、それを伺ったらノーコメントでした。

ですけれども、インドの場合は、原子力発電所見てきました。ここは大変に、1つのところは7,000人のデモがあって、カクラパーというところですが、そこはデモがあったからだめだと言うんで、反対のデモかと聞いたら、そうじゃなくて、その7,000人ぐらいの人が土地を売ったんですね、その原子力発電所のために。ところが安く売り過ぎたんというんで差額を返せと。今土地を調べたら高かったと、そういうデモでした。

だから、原子力反対ではなかったということがわかったんですが、それに関連して私事のことを申し上げますと、実は川内市というのは、私の夫の方の、木元の方のここは出身地なんです。きょうも実は終わりましたら、高江というところにお墓があるんですけど、そこに墓参りに行かせていただこうと、お天気もよくていいなあと思って。それと実は、木元が代々持っている土地をこの川内の原子力発電所にお売りしたんです、九州電力さんに。それで木元の父はもう4年前に亡くなりましたけれども、亡くなるまで、九電には土地を安く売ったなあと嘆いておりましたから（笑声）、そのインドの7,000人のデモと同じで、やっぱり私もデモしようかなという感じでおりますけど、そんな縁がありまして、川内にはなかなかこう来るチャンスがないんですけれども、こういう機会を与えていただいて、本当に私事の方も満足させていただいて、できたら九電さんに値上げ交渉までさせていただいてと、そんな気分でおります。

そういうわけで、きょうは「原子力報道とメディア」という関連でお話をさせていただくんですけど、中村政雄さんがきのうですか、きのうの中に私のことも話してくださって、同志がよく言ってくれたと、その続きを少ししゃべらせていただくと、新聞報道で、私の原子力委員、3年やりまして、ことしが4年目に入るわけですけど、いろいろ考えるところがあって、原子力委員辞めたいということを申し上げました。

これは、はっきり申し上げて、原子力委員会は、何のためにあるのか、わかんなくなったからですね。

さっきもおっしゃいましたように、私は、原子力委員に約4年前になるときまでには、もう既に資源エネルギー庁の方でエネルギーの仕事をさせていただいて、総合エネルギー調査会とか電気事業審議会とか、そういうところで需給の見通しであるとか、細かく言えば原子力部会はずっとやっています。原子力委員よりもずっと、エネ庁の方の原子力部会をやっています。

それは私はどういう立場かという、やはり一般の市民の立場であり、少しは勉強している立場でありということで出させていただきます。ただし、私は、主婦連合会とか消費者連合会とかそういう団体に属していませんので、一匹オオカミですので、割合ははっきり言えることは言わしていただいております。それなりに私も原子力は理解しているつもりです。

そういう立場で原子力委員の任命があったときに、当時これは原子力委員会の組織、多分皆さんよくわかっていらっしゃると思うんですが、5人いるんですね、原子力委員会は原子力基本法で決められていて、5人のうち1人が委員長、副委員長とこうなるわけなんです、この5人をどうやって決めるかというのは、これは国会の承認人事というか、同意人事なんです。ですから一回国会にかけられて、これとこれとこれを委員にするかどうかとって、大体共産党の方は反対なんですけど、ほかの方は大体OKということになる

らしいんですが、国会でちゃんと同意をいただいて任命されるというんで総理任命なんですね。

私が任命されたときは、総理大臣橋本さんでした。橋本さん、ちょっと気取った格好で、格好でというか、もともとそういうタイプなんだけど、今の小泉さんは、本当に現代風というか、すっと背筋を真っすぐお立てになって、こんなになって歩いてきますよね。あれカッコいいんですよ。橋本さんの場合は、剣道をやっていらっしゃるから、古くからのこれも私がニュースキャスターやってたところからのお友達ですけども、お友達というの語弊がありますが、でもお友達なんですけど「龍ちゃん、龍ちゃん」と奥さんと一緒に呼び合っているんですが、あの龍ちゃんはですね、ハートはすごく優しいし、好人なんですけど、剣道をやっているせいか、こうなんですよね、こういうふうに、こう歩いてくるもんですからすごく威張って見えちゃって、損していると思うんですが、直したらと言ったら、もう直らないと言うんですよ。だから気の毒なんですけど、だから剣道やるとカッコいいんですが、こういう格好でこう来ますから、それで「キモッちゃん、悪いけど、大変だけど今、アゲインストの風の最中だから」、事故があった後ですから、「大変だけど頑張ってくれ」とおっしゃって、昔から一緒に番組に出ていただいたりしたもんですから、私でできることがあったら言いますけれども、なぜ私かということなんだと。そのころ科技厅に原子力委員会が、総理府のあれ直属なんですね、今は内閣府の直属というか、感じになってますけれども、総理府なんですけど、事務局は科学技術庁が持っていて、当時の構成は、委員長は科学技術庁長官、大臣です。それから4人が選ばれた人たちがなっているという感じで、その中に非常勤で私が入ることになったということなんです。

そのときのおっしゃりようが、なぜ私が、まあ民間で初めてですし、専門家じゃありませんし、専門家って、技術的な専門家でもないし、それからいわゆる電気・電力関係あるいは放射線関係ということでもないし、ごく一般の消費者の代表みたいな感じです。それでしかも女性だということで、かなり異例だったわけですけど、何で私がつて伺ったら、ふだんから原子力の勉強は、原子力部会のエネ庁の方でやっているし、それから割合言いたい放題言う方だし、実は原子力委員会というのは、大変に形骸化しちゃっていて、元気がないと、何やっているかよくわからないところもご批判があると。だから穴あけてくれと言われたんですよ、風穴をあけると。

ああ、それなら面白いかなと思って、私も原子力委員会を知らませんでしたから、どういふことをやっているか見に行っただけです。見に行ったら、科技厅長官は大臣ですから、いつもいらっしゃらないんですね、4委員だけなんです。1人欠けても3人、3人がいないと成立しない委員会です。で、取っ替え引っ替えやっていたらと思うけど、行ったら3人しかいなくて、それから説明に当時は鈴木篤之さんが核燃料サイクルのことを、「もんじゅ」のことを報告に来ていました。それで、テーブルを囲んでお話になっていたんですが、私、傍聴席にいたんですね。原子力委員会ごらんになった方がいらっしゃるかも知れませんが、私が行ったときなんか、もうほんとにお通夜かなと思った。「なんとかかんとか……このたびもんじゅのことを……」こう「ああ、そうですか」、全然聞こえないんですよ。それで、わざとこういうふうにしても聞こえない。それでなんか、「ああ、そう……」30分かかるうちに終わっちゃったというんで、当時朝日新聞の方だったと思うんです、聞きに来て、「木元さん、今度何かなるとかならないとか」と言われて、「ええ、ですから見学に来ました」「見学に来ていかがですか」「ええ、葬式かお通夜かって感じですね」と言ったら、「どうですか」と言うから、「うーん、ちょっと考えちゃうな」という話をしてたんですが、その後で、だから活力をこちらに持たせるような工夫

をしたいと、何とか頑張っしてほしいとおっしゃられて、もしかしたら、やりがいあるかなと思ってお引き受けしてやらせていただいたんですが、やっぱり3年やっても、かなりきついんですね。火曜と金曜が定例委員会なんですけど、やってる議題というのが、私いなくてもいいんですよ。

原子力委員会というのは、原子力基本法を見ると、原子力に関する平和利用ですが、平和利用というものがいかに担保しているかということのをウオッチしているのが大原則ですけども、自らが立案し、審議し、決定するという権限を持ってるんですね、持っているにもかかわらず、自分たちが発案してこうしよう、ああしようということも全く出てこないです。

ただ事務局が用意した案件を、ちゃかちゃか、ちゃかちゃか審議して、事前に根回しして、今度の議題はこうこう、こうでありますので、こうでございますと、ああそうですかと伺って、何かやるみたいなんで、私すごくそういうの嫌なの。だから、ああ、議題をやって、こうこうこうですぐらいでいいです、後は当日公開ですから、公開の場でやらしてくださいということで申し上げて、やったら、私が委員になってからいろいろ絡むんですよ、ほんと絡むの、わかんないから。絡むから時間が長くなって昼飯の時間が先になっちゃうなんて変なことを言われちゃって、だからなおさら延ばしてやってるんだけど、そういうことがあるし、それからやらせていただいている案件が、本当に日本の原子力行政をどうするかと、例えば最近の例で言うと、海山町でああいう住民投票があったと、こういう結果が出た、それをどう踏まえるかみたいなことを審議するのは私、本当にやりがいがあると思う。ところがそうじゃないんですよ。原子力発電所の燃料が8掛ける8から9掛ける9になったがどうかと、そんな8掛ける8、9掛ける9でいいじゃない、そんなの、うまく安全委員会が保障してるんならと思うんだけど、そういうことをやらなきゃならないんですね。

私は、すごく時間をもったいない、もったいないというのは、またこれ愚痴っぽくなって本当に申しわけないんですけども、原子力委員の中には、常勤と非常勤といるんです。今のバランスは常勤が3人です、だからこれは特別職の国家公務員です。それから2人は非常勤です。私を含めてもう1人上智大学からいらした森嶋先生という環境問題をやっていらっしゃる先生がことしからお入りになった。来ないのよ、彼は、出てこないのよ。ほんとここだけで愚痴言ってもほんとしょうがない、わかっていたきたい。

なぜ来ないかという、ご自分の仕事が忙しいし、海外の仕事があるしということと、実は、常勤の方はちゃんとしたお給料がいただけます、かなりの額です。総理大臣に匹敵するぐらいじゃないかなと。それからボーナスが年2回、4、5カ月ぐらい出ますね。もうウエツと驚きますよ。だから150万ぐらいもらったとすんでしょ。考えてみてくださいよ、それから退職金が出るんですよ。3年やると500万近くなるんじゃないですか。今の委員長、今度委員長が大臣出なくなりましたから、新しく省庁再編で。そうすると委員長が中から上がってたんですね、これちょっと私たち知らないうちにそうなったんですけど、だから私たちが選んだんじゃない、その委員長給料高いです、それよりも。それから、だから今の委員長は、今度6年やったから、7年目ですから、ボーナスはすごいですよ、ほんと私悔しい。働いている量なんていったら、私の方が働いているんだもん、本当の話。それは後から話しますけど。

それで私たち、私たちというか、森嶋先生が非常勤で今度お入りになって、前から存知あげているし原子力部会だとか、科技厅の高レベル放射性廃棄物の処分懇談会とかでずっと一緒でしたし、もうこの方とも一生懸命やらしていただいたから、うれしいなと思っ

たら、ある日、突然、2回目か3回目出席なさったときに、「木元さん、ちょっと伺いたいことがあるけど」。何と言ったら、「あんた幾らもらってる」と言うから、はっきり言っちゃって3万、今ちょっと値上げになったの、日額という表現なんですけど、時間給なら許せるんだけど、日額なんですよね。最初は3万100円だったかな、ちょこちょこちょこっと上がって今3万2千幾らになっていると思うの。そこから税金がばですよ、2カ月おくれよ。許せないわよ、そんなの。

それで出た日の計算をするんです。時々ちょんぼがあつて、先月も少なかったことがわかって、今月1回ふえたんだけど、そのことまで私は神経使いたくないわけですよ。でも神経使うほど安いんですよ。それで森島先生は、私にお聞きになって、いや私はこうこうこう、「え、同じか」と言うから「同じよ」と言ったら、「3年やっても値上げにならない、同じ」と、先生何と、「いや、僕は余りにも安過ぎてびっくりしちゃった。だからこの分しか僕は働かないから」と言って、来ないの。(笑声)

それで、ちょっとがっかりきて、原子力委員会こうなっちゃまずいなど、でも私、面白いというか、非常に問題があるし、やらなきゃならない部分もあるし、私がお手伝いできることがあればと、カッコよく言えばそういうことがあるので、今来てますけれども、本当にだから3年で辞めようと思ったんです。辞めようと思ったら、この橋本の龍ちゃんが「ちょっと待ってくれ、いろいろ待遇改善とか含めて考えるから、もう少しやってくれ」と。それから「省庁再編になったし、原子力は今こうこう、こういう状態だから、あなたにお頼みすることが多分出てくるだろう」と。では、「私のやりたいことをやらせていただいてよろしいですか」と言ったら、「いい」と、じゃ、「定例委員会は出ません」と、「定例委員会で8掛ける8とか9掛ける9とか、やれ建屋のこのところにトイレを建てるから、それはいいか悪いか、それやめてよ、それだったらほかの人がやればいいから」と。

それと非常に残念なのは、原子力委員会で資料がいっぱいこの机の上に委員会でありますね。私は絡む方だから絡むんですけれども、そうすると何か案件が終わると、委員長なんかは、悪口でも何でもない、本当なんだから。委員長がこういうふう書類を揃えながら、こうやって「きょうはこれぐらいだと思うんですが、事務局、来週あるの、ないの」と聞くんですよ。ぞっとしましたね。事務局が「ええ、来週また火曜日」って、金曜日このごろなくなって、内輪の委員会になっちゃったんですけどね。議題がないんだと思います、正直言って。作らないから議題を。自分たち問題意識持ってないから。「で、議題は、火曜日あるのね」って、「議題は」。「議題まだ考えておりません」ですよ、事務局が。「あ、そう、じゃ早く考えて」これが委員会だと思ったら情けないですね。

私もし本当に本気になって、高給くれてね、やるんならもっとすごいですよ、やらせていただくことは山ほどありますよ。住民投票の結果だとか、住民投票はどう原子力委員会は理解、今の段階で理解したらいいだろうとか、それから住民とどういふふうな対話をしていくとか、積極的にやらなきゃいけないことは本当にたくさんある。だけどそれは自分から発案して審議して決定するという権限を持っていながら、それを遠慮してますね。遠慮しているというよりも私は逃げているとしか思えないんです。

それで私が原子力委員会の委員になったときに3つのことを私はこれをモットーにすると言いました。

まず、見える原子力、絶対見えなきゃいけない、ということは、本当に公開の場をたくさんつくることだし、何でも公開しなきゃいけないと私は思ってます。いいこと、悪いこと含めて。

それから、もう1つは逃げない原子力。いつも何があってもちょっと逃げ腰になる。そ

れは国でも事業所の方でもそうかもしれませんけどちょっと遠慮しちゃってるんですね、そうじゃなくて、申しわけない、悪いことは悪い、だけれどもやることはやると、きちんとした姿勢が見えないで、いつもやるんだかやらないんだかわからないと、逃げ腰のように見えるから、逃げないでやる。

もう1つ、3つ目が行動する原子力というので、行動します。これだけはやらせてくださいと。それを最初にも申し上げたし、今度改めて、じゃしばらく定例委員会を休みますけれども、委員は辞めないで、これだけをモットーにやらせていただきますというのでご了解をいただきました。それでやらせていただいています。

そのことを多分、きのう中村さんがちょこっとおっしゃってくださったんではないかなと思うんですが、かなりこれは反響が、内輪というかでありました。エネ庁のきょう江越さんも来ていただいていますけれども、エネ庁のほうでも大臣から長官からすごく心配していただきました。でも私は逃げているわけじゃない、もっと原子力見えてほしいと思うし、もう少し理解してほしいと思う部分があれば、ちゃんと行動しようということで、これはやりますということで、休職と一部に書かれてしまいましたけれども、職は辞めていません。また、原子力委員の肩書きも外していません。安いけどやらせていただいている状態です。

いつでも私にもし原子力委員として拙いことがあればいつでも辞めさせていただきます、喜んで辞めますというんですけれども、まだそのお声はないので、どうなんだろうなと思っているんですが、しばらく泳がせてみようということかもしれません。

ですけど、私は、行動を始めました。それでちょっときょう白板を用意していただいたんですが、これはメディアの方たちにもいろいろ取材を受けたり、こちらからお話を申し上げたりして、かなりはつきり書いていただいたんですけれども、既に、もしかしたら、きょうは刈羽の方たちもいらしていると思うんですが、新潟県の柏崎・刈羽ですけど、その刈羽の方のところに、この間18日の日曜日に伺わせていただいております。

それはどういうことかという、私たちがやらなきゃいけないというか、いろんなやり方があると思うんですが、ちょっとでっかく書きますけど、こういう名前のものを立ち上げたんです。「市民参加懇談会」。

最初のこれは原子力委員になったときから、こういうものはどこにあるかなと思って探ってたんですけど、全くないんですね。それで円卓会議も、今の長期計画をつくる前の長期計画、6年ぐらい前ですけど、そのときも円卓会議をやりました。その前にご意見を聞く会というのをやりました。そのときに高木仁三郎さんとか、いろんな反対派の方、初めて入っていただいたんですね。

そういう経緯がありますので、そういうものが円卓会議でも継続してもっと欲しいというご要望があって、今度の長期計画をつくる場合も、策定会議をやりましたけど、その策定会議の中でも円卓会議の中で言われているような市民との対話、国民とのという言葉はありましたけど、国民との対話をいつもできるような組織はあるだろうかということがお尋ねの中にありましたし、ぜひ持ってほしいというのはありました。

私もそういうものが欲しいと思いましたので、今回はその1つの条件として、原子力委員は継続しますと、継続しますけれども、新しい原子力委員会になったんだから、何か外で見えるもの、そして私が本当にやっているなと確実につかめるものが欲しいということをお願いしまして、最終的にはこの名前になったんですけど「国民対話懇談会」とかいろんなのがありましたけれども、最終的には「市民参加」と。もっとフラットな感じが、イ

メージで「国民」と大上段に振りかぶらないで、市民というとまたいろんな定義が難しいんですが、一般の普通の人々が参加をして話せる、対話をする、お話をするという意味での懇談会はできないかということで立ち上げました。

これも紆余曲折いろいろありまして、最初は、原子力委員会の中で、私が動議ということで、実は、こういうことをやらなければ、原子力委員会そのものに危機感がないと、何かしゃんしゃんと事務方が用意したものをやっているだけじゃなくて、自分たちがやらなければ原子力どうなっちゃうかわからないよという危機感を持ってほしいという思いがあって申し上げたときに、じゃ、どうぞおつくりくださいみたいなものだったんですが、ここからが本当に悔しかったんですけれども、原子力委員会というのがあります。かつての原子力委員会の下には専門部会がいっぱいあるんですね。放射線の部会だとか基盤技術だとか、核燃料サイクルだとか、それをまた同じように専門部会で立ち上げるという案が先に出ちゃったんです。

で、私は、ばーんと怒ってしまって、真紀子さんほどじゃないですよ、怒って、こういうふうなものを立ち上げる、まあ、以前に、この例えば専門部会立ち上げるのはいいと、いいけどメンバーも余り違わないじゃないかと、旧態依然でしゃんしゃんじゃないかと、そうじゃなくて、こういうものを立ち上げるにしても、市民がこういう部門を原子力委員会立ち上げることをどう思うだろうか。

それから、こういうものを立ち上げるけど、どう考えるということをお聞きしてみたらどうかと。お聞きしながら、そうだね、これは意味があるね、そうね、核燃サイクルもいいという人もいれば悪いという人もいるし、じゃ、これは日本にとって何なんだろうか、そういう基本的なことを考える委員ならいいよと、専門家だけがしゃんしゃんと進んでいくんならいいよと、意見もいろいろあります。

そういうものを直接ぶつけてくる場所がまず前提にあって、その下に市民参加懇談会が加わって、それから専門部会が立ち上がるんならいいということをやったら、ここでまたビビビビとこうやって、じゃ、木元委員の言うように、原子力委員会の下にこういうふうな市民参加懇談会と、それからね、評価をする何だっけな、施策評価委員会みたいなものをまたつくと、パラレルにつくると言うんですよ。それで評価の委員会の下に専門部会をつくらうと、こういうことなんです。

それで私は、違う、全部に網かぶせたいと言ったら、これ通らなくて、そのうちだんだん伸ばしていくという気はありますけど、この市民参加懇談会の下に例えば教育の分野はどうだろうかとか、家庭生活の分野はどうだろうかということは入っているかもしれませんが、今特に専門部会この下に持とうという気はありません。これだけで手いっぱいだと思う、当面は。そういうことで立ち上げたんですね。

この市民参加懇談会というのは、そういう意味で大体意味がわかっていたと思うんですが、今までの例えば国もそうですが、事業者の方もそうですけど「国民のあるいは市民のご理解をいただくために」という言葉が入っているんです。

これは刈羽に伺ったときも反対派の女性の方にお会いしましたが、その方たちもやはりペーパーを持っていて、それには「国民の理解を得るために」とか、それを獲得するためとか、何かそういう言葉なんですね。

もう1つ、PAという言葉がありますね。これも私はちょっと嫌いなんです。簡単にPA、PAと言いますが、パブリック・アクセプタンスですよ。アクセプタンス、受け取る、受容するということです。パブリック、公衆、民衆、国民が受け取れるためにはどうしたらいいか、あくまでもこちらからこう持って行って、受けとめてもらうために何